



Photo: Heine-Professen

行動する研究者

ロラン・ポルディエ

今年34才になる人類学・薬理学者のポルディエは、8年前から殆どインドに住んでいる。ボンディチェリ研究所社会科学部門のディレクターをはじめ、波瀾に満ちたキャリアを歩んで来た。1995年にカンボジアでフランスの「世界の医師団」と「国境なき薬剤師団」と共に人権保護運動に身を投じた。「社会のために何かをしたいというナイーブな気持ちからとびこんだ」というポルディエは、これからの運動に「人類学

的な」アプローチを応用しようとしている。薬用植物の研究を行ううち、ポルディエはそれらを使う人々と関わりを持つようになった。

伝統医学の学校

ポルディエは伝統医学を研究しこれを支援するため、1997年にNGOのRSI(流浪民研究支援国際団体)を仲間たちと立ち上げた。その2年後にいったん民族学の研究に戻るが「8年を経た今も、自分が理解したものはほんのわずかにすぎない。社会の複雑さを知るにつけ、自分の存在がいかに小さいかを知る」と云う。インドのラダークで、現在消え去りつつあるチベット医学の復興プログラムを支援し2000年のロレックス賞を受賞したポルディエは、この問題をよく知っている。ポルディエの率いるチームは数年間にインド北部の深い山岳地帯の四分之三をカバーし、伝統医学の施術センターと研修センターを22か所設立した。ポルディエは「RSIからインドのNGOへと運動が繋がっていった」ことに満足している。

「アムシ(チベットの医師)たちが人間の身体に対して持つ視点を共有したかった。社会の中でそれが果たす役割をよりよく理解するために」というポルディエはインドのダラムサラ・チベット医学研究所の証書を持ち、ヨーロッパではいくつかの大学で定期的に講義を行っている。

「合理的な社会参加」を旨とするポルディエは、絶対的中立性などは存在しないとし、研究者は社会に対し一定の距離をおくべきだという論議を一蹴する。ポルディエのグループのホームページに、コレージュ・ド・フランスの民族学者ミシェル・ペランの言葉が引用されている。「相手がとても遠くにいる時、彼に近づくには相手の違いを受入れ、そして愛し、その違いが絶対に埋めることのできないものではないということに認めるのだ」

「世界に包帯を / 医療を考える」ロラン・ポルディエ監修、カルタラ出版、パリ2005年。
www.ifpindia.org
www.nomadrsi.org



A. Cavalli/Hoa-qui